



脚本 幻の獣



karasuno10

[http://unohirotest.mydns
.jp/hiroshi/cgi/top.pl](http://unohirotest.mydns.jp/hiroshi/cgi/top.pl)

憎しみの一瞬

幻の獣

烏野
博史

人物

ブレア・ローリー（60）生物学者、男性

ロイ・モーガン（45）記者、男性

男性店員（35）

① ショップ

絶滅した牛、ブルーバックの白黒写真と青い毛皮の絨毯と角で作られたアクセサリー一式が飾られている展示スペースの前に男性店員（35）が立っている。

男性店員「お客様、こちらブルーバックのアクセサリー一式でございます。ブルーバックの毛皮は非常に美しく、角は非常に堅く、肉は非常においしいそうです。19世紀初頭に乱獲が進み、保護される事なく絶滅してしまいました。しかし、こうして、今でも高値で取引されています」

男性店員は耳をそばだてる。

男性店員「えっ、ブルーバックを売りに出したらいくらで買い取ってくれるかって、ご冗談を。でもそうですね。四肢が全部揃っているなら10億はくだらないかと思われま

す」
ブルーバックの白黒写真。

② 森・開けた場所

泉で水を飲む青い牛、ブルーバック。

足音。ブルーバック、足音の方を見る。

ブレア・ローリー(60)が立っている。

ブルーバック、ブレアの匂いをかぐ。

ブレア「君に紹介したい人がいるんだ。大丈夫、彼ならきつと」

ブレア、ブルーバックをなでる。

③ 小屋・外観

森の中に小屋が立っている。小屋の前には麦の畑がある。

④ 小屋・リビング

腕を組み、テーブルに向うロイ・モー

ガン(45)。奥に書斎への扉、手前は

玄関がある。テーブルの上には原稿用

紙と写真の束とカメラと動物の資料ノート。

ロイ、腕を組み、原稿用紙を覗む。

ブレア、書齋から出てロイを見る。

ブレア「どうだ？」

ロイ、ポケットからパイプを取り出し、
煙草を吸う。

ロイ「まあ、記事のほうは書けるでしょう。

かなり取材協力もして頂きましたし」

ブレア、机の上の写真の束を手取る。

ロイの声「この10年間、随分森も増えました。
それだけでも、大変な事だと思います」

山の斜面の定点観測写真。ブレアが写

真の束を繰っていくと、山の森が広が

っていくのがわかる。

ブレア、ロイを見る。

ロイ「あとは、どう大衆に伝えるか……」

真っ白の原稿用紙をにらみつけるロイ。

ブレア「……来なさい。とっておきの場所を
教えよう」

ロイ「今日は植林は良いんですか？」

ブレア「ああ」

ブレア、玄関のほうに歩いていく。

⑤ 森・湿地

皮袋を持ったブレアの後に続き、ロイが山道を下っている。ロイはカメラを首に下げ、三脚のケースを持っている。

シダ植物を払いのけるロイ。

ロイ「この辺り、緑が深いですね」

シダをかきわけるブレア。

ブレア「ここらはまだ一度も焼けていない」

ロイ「ああ、どうりで」

ブレア、地面を見て、しゃがみ込む。

牛の足跡。

ロイ「ひとつ、お尋ねしてよろしいですか」

ブレア「なんだ」

ロイ「先生が何をしてきて、なぜ今のようになったのか」

ブレア、立ち止まり、振り返る。

ロイ「良いじゃないですか。私だって妻子に逃げられた事まで話しているんです」

ブレア、再び歩きだす。

ロイ、溜息をつき、歩き出す。

ブレア「……私がここに住み始めて30年になる。それまではケープ地方に住んでいた」

ロイ「ちよっと待つてください」

ロイ、メモ帳を取り出す。

ブレア「妻と娘がいたが、研究のほうが大事故で、この山にも良く来ていた」

ロイ「……見せて頂いた動物の資料は、その時のものですね」

ブレア、頷く。

ブレア「何度か戦争や暴動が起こったが、ここは静かだった。ある日、家に戻ると妻と娘は殺されていた。同じ人間に……」

ロイ「理由を聞いてもよいですか？」

ブレア「私はイギリス人で娘は混血児だからだ」

ロイ「……なるほど」

ブレア「その後は、ここで暮らし、畑を作り、パンを焼き、いつしか研究をしなくなった」

ロイ「やっとながりました」

ブレア「人間は人間の都合で森を焼き、他の動物達を殺す」

ロイ「人間は残酷ですからね」

ブレア「私は……人を信じない。私だけは動物達のために森を、木を植えよう。私は今でも、森の事を人間に知らせないほうが良いと思っています」

ロイ「それは……」

ブレア「だが、もし、君がこここの事を記事にする事で、自然が守られるというなら、記事にしてもかまわないよ」

ブレア、微笑む。

ロイ「ありがとうございます」

ブレア、道を外れ、茂みに入っていく。

ロイ、追いかける。

⑥ 森・開けた場所

茂みの中から下りて来るブレアとロイ。

ロイ、目を見開く。

目前に泉が広がっており、泉の前に青

い牛、ブルーバックが立っている。

ロイ「素晴らしい」

ロイ、三脚のケースに手をかける。

ブレア、皮袋を地面に置き、ブルーバックに歩み寄る。

ブレア「長い間、人間に駆逐されずに生き残ったブルーバックの亜種。私の家族だ」

ブレア、ブルーバックの首に振れ、目を細める。

ブレアを見つめるブルーバック。

銃声。ブルーバックの首にライフル弾が貫通する。

ブルーバック、倒れる。

ブレア、ブルーバックに手を伸ばす。

ブレア、目を見開く。

ブルーバックの首の下に流れる血液が泉に流れ込み、赤く変色していく。

ロイ「やっと終わりました。いや、長かった」
構えたライフルを下ろすロイ。ロイの傍には開いた三脚のケース。

ロイ、ブルーバックに歩みよる。

ブレア、啞然と、ロイの表情を探す。

ロイ「なかなか、教えてもらえなくて、ひやりとしましたが……確かに美しい動物だ」

ロイ、足でブルーバックの首を押す。

押されるがままのブルーバックの頭。

ブレア、息を飲む。

ブレア「(絶叫)」

ブレア、ブルーバックの傷口を抑え、血を止めようとする。

ロイ、ブレアをライフルで殴り倒す。

ロイ「やめてください。商品が傷みます」

ブレア、がくがく震えて、うまく立えず、皮袋のほうに這いずる。

ブレア「は、はやく手当てしないと！」

ロイ、ブレアに銃口を向ける。

ブレア、ロイのほうを見る。

ロイの背後で倒れているブルーバック。

ブレア「君はなんて事を！ あの動物は——」

ロイ「絶滅種、ブルーバック。知っています。」

私は元々あれを狩りに来たんだから」

ブレア、目を見開く。

ブレア「なぜ、こんな、むごい——」

ロイ「あれは、保護するより、売るほうが金になる。これで妻子を迎えられます」

ブレア「君は私の活動が素晴らしいと……あれは嘘だったのか」

ロイ「本心です。先生の活動は素晴らしい。

特に人に知られず、後々目立たなくて良い」

ブレア、目を見開く。

ロイ「貴方の信頼を得るのは大変でした」

ロイ、ブルーバックの死体を見る。

ロイ「運ぶのは骨が折れそうだが、あなたが作った山道のおかげで何とかなるでしょう」

ブレア、ロイの足を掴む。

ロイ、銃口をブレアの額に押し付ける。

ロイ「先生を殺したくはありません」

ブレア、ロイを睨む。

ブレアが腹ばいに倒れている。
地面に残ったブルーバックの血痕。
ブレア、ガタガタと震える。
ブレアの絶叫が森に響く。

⑧ 小屋・前（朝）

鳥の鳴き声が響く。

⑨ 小屋・リビング

窓から光が差し込む。

床には、グシャグシャに破れたブレアの研究資料が落ちている。

軍服に身を包み、ライフルを抱えたブレアが椅子に座っている。ブレア、ポケットから写真を取り出す。

ブレアとロイの笑顔の写真。

ブレア、写真をポケットにしまい、立ち上がる。

ブレアが玄関から出て行く音。テーブルにはブルーバックの写真がある。

著者HP：[鳥野の箱庭](#)

